

手縫いのグローブで白球を追う 焼け跡の野球少年

気風のいい江戸っ子の父親は戦地へ送られて、祖父と母親がお店を守る、白金の理髪店。生まれたばかりの河村さんを抱いてくれた、父親の仲良しは、ミッドウエーに送られ戦死します。疎開した母親と子どもたちは、空を赤く染める東京大空襲を、水戸から眺めました。焼け野原の東京へ戻り、くず鉄や割れたガラスを拾い集めたお金で、三角ベースで使うボールを買った河村少年。青パットで知られる大下選手に憧れ、母親が夜なべして縫ってくれたグローブで、野球に打ち込んだのです。

戦争体験者

河村弘一（かわむら・こういち）さん（83歳）



昭和16(1941)年、白金志田町(現・白金)の生まれ。120余年の歴史を持つ「白金理容かわむら」の名物マスター。祖父が創業した店を、父が母とともに継ぎ、4人きょうだいの長男である河村さんが3代目。双子の弟とは容貌がそっくりで、お客さんからよく間違えられるとか。妻と2人の娘とともに、今もお店で現役を続けている。小中学校では野球部に入り、ピッチャーやサードとして活躍。中学3年の時には、港区で2位の成績を収める。60歳過ぎまで地元の草野球チームでプレーしていたが、現在はもっぱらテレビ観戦。

interview 河村弘一 さん

撮影場所 ● 白金理容かわむら

創業120余年のお店の前で。手にするのは、愛用のグローブと、巨人軍時代の王貞治選手のサインボール。



山崎詩歩（やまざき・しほ）さん

辻孝太郎（つじ・こうたろう）さん

小松尚平（こまつ・しょうへい）さん

祖父が始めた白金の理容店
お客さんに子守りをされて

小松——理容店を何代も続けておられるので
すね。

河村——創業は明治32（1899）年。福井
からやって来た祖父が、このあたりで「河
村床屋」という店を始めたんです。下町だ
けど畑や田んぼもある、のどかなところだっ
たそうですよ。

小松——2代目がお父さまなのですね。

河村——父も理容の修業をしたのですが、
母と結婚し、やっと一人前になったと思っ
た矢先に、戦争が始まって召集されてしま
いました。昭和10（1935）年、父が21歳
の時です。中国戦線へ送られ、上海、南京、
ハルピンなどを転戦するんですが、あまり
悲惨な目には遭わずにすんだそうです。た
だ、除隊してはまた召集されの繰り返しで、
10年も軍隊生活が続いたんで、その間は、
祖父と母が店を守っていました。

小松——お父さまは、どんな方でしたか？

河村——私が覚えてるのは復員後ですが、
最後の江戸っ子というか、〈宵越しの金は持
たない〉タイプでしたね。その日の稼ぎを、
その日のうちに娯楽や飲食に使っちゃう。
気風がよくって、男前。モチないわけがない。
「おいしいもの食べに行こう」って優しくし
てくれるから、私たちも大好きでしたよ。

小松——ご自身は昭和16（1941）年生ま
れ、3代目ですね。

河村——双子の弟と一緒に生まれました。
その頃は、保育園や幼稚園に預ける家もま
だ少なく、私たちは、赤ん坊のうちから
店へ連れて来られ、お客さんたちが面倒を
見てくれていました。その中に父とくに
仲良しだった人がいて、「親父の代わりだ」
と、1歳前の私をよく抱っこしてくれたそ
うです。そして、出征前に「これが最後か
もしれないな」と母につぶやいた言葉が、
本当になってしまっただけ。ミッドウェー海

水戸から見えた真つ赤な東京の空
翌朝に舞ってきた、空襲の燃えカス

辻——疎開をされたそうですね。

河村——茨城の水戸の郊外に親戚がいて、
母と子どもたちで縁故疎開をしました。常
磐線の急行がなくて、上野から各駅停車に
乗ったのを覚えています。荒川沿いに建つ
レンガ造りの煙突が、見る角度によって1
本、2本、3本、4本と数が違って見える
のに驚いたのですが、映画でも有名な「お
化け煙突」千住火力発電所でした。

辻——水戸は農地もあるでしょうから、食
べるものには困らなかったのでは？

河村——飢えることはなかったけれど、主
に食べたのはサツマイモ。それも今みたい
に甘くはなく、燃料用のアルコールを作る
ための品種です。母が懸命に工夫してくれ
ましたが、決しておいしくはなかったですね。
銀シャリ（お米だけの白いご飯）もたまに出
ましたが、「もっと腹いっぱい食べてみたい」
というのが夢でした。二ワトリを飼っていて、
卵かけご飯にするのがたいへんなぜいたく。
その二ワトリをつぶして肉を食べるのは、
年に1回あるかないかの大ごちそうでした。

辻——お母さんは、水戸でも理容店を始め
たそうですね。

河村——雑貨屋の一角を借り、床屋の椅子
をどこから仕入れ、粗末な鏡とともに
置いたんです。近所の人たちがお客さんで、
お代は現金でもらってましたが、野菜なん
かの食べ物とも交換してたんじゃないでしょ



河村さんの母と、幼い頃の河村さん(写真右)
乳母と河村さんの双子の弟・保弘さん(写真左)



昭和30（1955）年頃の白金の理容店



平成5（1993）年頃の白金の理容店



うか。そのおかげで、私たちきょうだいは生き延びたようなものです。

小川に行って、弟や妹とドジョウとかの小魚をつかまえたり、池や沼で水を抜いて泥をかき出す「かいぼり」のとき、底に残った魚を捕ったりもしました。丸のまま煮たドジョウはおいしかったな。

辻—— 兵士の髪を刈ることも多かったか。

河村—— 母は近くの兵舎まで出向き、出征前の兵隊さんの髪を奉仕で刈っていました。1日に40人以上も、手動のバリカンで丸刈りにしたこともあるようです。ただ、彼らは全滅したパラオのペリリュー島、アンガウル島で戦い、ほとんど戻らなかったそうです。

辻—— 東京大空襲のことを覚えておられるそうですね。

河村—— ある夜、母が緊張した声で「起きなさい、起きなさい」と言うのです。外へ出て東京の方を見ると、空が真っ赤でした。

くらい。自宅もちろん、跡形もなく焼けていました。そんなところでどうやって寝泊まりしたかわかりませんが、たぶん廃材やトタンなんかを組み合わせてバラックを建てたんでしょうね。

山崎—— お店はどうされました？

河村—— 道を渡った空き地に、焼け残った椅子と欠けた鏡を置いて、祖父が青空床屋を始めました。人間の髪は、何があっても伸びるからね（笑）。すぐに仕事を始められたのは、この商売のありがたいところかも。ある時期、ベントレー（イギリスの高級自動車に乗った白人が、店の前の通りをよく走っていたんですが、サングラスをかけ、とにかく格好が良かったですね。あとで人から聞いたところでは、東京裁判のために白金三光坂の服部ハウスに滞在していた、イギリス人の関係者だったそうです。

山崎—— 空から白い粉が撒かれたと聞いたのですが。

た。時々ピカピカッと光ったのは、後から考えれば、B29のジュラルミンの機体が、地上の爆発や炎を反射してたのかもしれない。その時は、何が起きてるかよくわからなかったけれど、ある日、起きて家の前の畑に行ったら、ひらひらひらひら、燃えカスみたいなものが空から落ちてくるんです。一晩かけて、東京から飛んで来たんでしょうね。その中に、当時の高額紙幣だった10円札の半分焼けたのがあったんですが、近くにいた大人がすぐ持っていてしまいました。

辻—— 水戸も空襲を受けたのですか？

河村—— 日立に大きな軍需工場があり、水戸にはその下請けをする工場があったし、常磐線の輸送基地でもあったので、終戦間際の昭和20（1945）年8月2日に大きな空襲に遭ってます。まだ4歳でしたが、日本の戦闘機が迎え撃つのを防空壕から見た覚えがあります。

河村—— DDT（よく使われていた殺虫剤）のことですね。衛生状態があまりに悪かったので、シラミやノミの駆除や防疫のために、進駐軍がB29を飛ばし、爆弾じゃなく殺虫剤の白い粉を空から散布したんです。私が小学校へ上がる昭和23（1948）年頃になっても、学校では、女の子たちがおかつぱ頭の上からDDTの粉をかけられて真っ白にされてました。

山崎—— 食糧事情は、良くなりましたか？

河村—— お米の配給は少なく、うどん粉やトウモロコシ粉なら、ましな方。具のないう汁だけのすいとんを作りました。海藻麺代用食といって、浜辺に打ち上げられるような海藻を、何かに練り込んで麺にしたものが配給されたこともありました。おいしいものじゃなかったけれど、近所の小さい子がその麺を食べ過ぎて、お腹の中で膨らんじゃってね。医者にも連れて行けず、そのまま亡くなったそうです。「これまできつと、

大人たちが「あれは隼だ」と話してましたね。

焼け残った椅子と
欠けた鏡を空き地に置いて
青空床屋を始めました

山崎—— 戦争が終わってどうされましたか。

河村—— 終戦から1週間くらいで、母と東京へ戻ってきました。田町駅で降り国道へ出ると、進駐軍のトラックやジープが何百台も、昼間（ひるまじ）から煌々（くわんくわん）とライトを点けて、品川の方から新橋の方にかけて走っていきました。兵士たちは姿勢を崩し、車から足を投げ出してね。それまで、規律正しい日本の兵隊さんしか見てなかったから、「なんて行儀が悪いんだ」と驚きましたよ。

山崎—— い自宅は変わっていましたか。

河村—— ここから渋谷の東急百貨店が見えるくらい、一面の焼け野原になってました。高い建物といったら、北里研究所のトンがり屋根と広尾病院、慶應幼稚舎の白い建物

何かをお腹いっぱい食べたことがなかったんだろ」と、近所のお母さんたちが涙ながらに話してましたね。

山崎—— 買い出しにも行かれたか？

河村—— 朝に出かけ、夕方に戻ってこられるぐらいの、埼玉や千葉、茨城あたりの農家へね。でも経済警察といって、統制品以外の闇物資を取り締まる警察官が、戦争



DDTを散布される人たち（提供：昭和館、所蔵：米国国立公文書館）



中からいたんですよ。捕まると、せっかく農家で手に入れてきたお米や野菜を、みんな没収されてしまう。ときどきは「年配の警察官が、そつと目で『行け』って合図してくれて助かった」なんて話を聞いたりもしましたけど。

山崎
——
小学校での給食は。

河村——ある日アルミのカップが配られて何だろうと思つてたら、脱脂粉乳をお湯で溶いたミルクでした。これが給食の始まり。でも、それだけじゃお腹がいっぱいにならないからお弁当を持ってきたり、家が近い子は昼休みに家へ戻って食べてきたり。昼休みのあいだ、ただどこかへ姿を消して、夕方まで空きっ腹を抱えてた子もいたんですよ。

お弁当で思い出すのは、妹が遠足で高幡たかはた不動ふどうへ行ったときの話。親が忙しくて、自分でお弁当を詰めてきた子がいたそうです。そのご飯が傷んでたらしくてね。お腹が痛

もちろん、ベーゴマ、ビー玉、メンコといった遊びもしましたし、高松中学校の池

でザリガニを捕ったりもしました。とにかく、動いて遊ぶしかないから、北は乃木坂^{のぎざか}、西は渋谷や目黒、五反田、南は高輪、東は永田町ぐらゐまで歩き回ったんですよ。近くに運送屋さんがあって、配送のトラック

くて歩けなくなり、先生におぶわれて駅へ向かったんだけど、着くまでのあいだに亡くなっちゃった。3年生か4年生なのに、亡きがらは赤ちゃんみたいに軽かったと、先生が泣きながら話してくれました。戦後数年経っても、そんな子どもがまだたくさんいたんです。

焼け跡から集めたガラスや鉄で三角ベースのボールを買った

山崎——当時の地図を見ると、白金には映画館や演芸場があったんですね。

河村——絶江坂の角にあった映画館では、ものです。白金演芸館は、芝居や浪曲^{なみのり}なんかがかかる劇場で、ボクシングの興行なんかもありました。旅役者の一座には子どももいて、同じ学校へ通うんですが、公演が終われば転校しなきゃならなくて、大変だなあと思ったものでした。

に乗っけてもらってたから、地理なんかも自然と覚えちゃうんです。

山崎——なかでも野球がとくにお好きだそうですね。

河村——最初は、三角ベース（狭い場所で遊べるように工夫された野球のような遊び）です。ただ、遊ぶためには、まず割れたガラスやくず鉄を集めなきゃならない。石油缶いっぱいになって業者へ持っていくと、たしか20円くらいで売れたんで、それでようやく、軟式テニスのような柔らかいボールを買うことができるんです。バットじゃなく、手で打つからですが、毎日のように仲間と遊びましたね。

昭和21（1946）年にはプロ野球が復活して、うちの店でもラジオの中継を流してお客さんと楽しむようになりました。私のお気に入り、東急フライヤーズ（現・北海道日本ハムファイターズ）の太下弘選手おおしたひろし。打球を遠くまで飛ばす天性の技術を持つ、名プロ

コラム 8 ● 白金の映画館、演芸館

まだテレビがなかった時代は、映画や芝居・演芸などが娯楽の中心でした。白金周辺には、絶江坂に『麻布松竹館』^{ぎょうばんか}、魚籃坂に『魚籃京映』などの映画館がありました。また『白金演芸館』という劇場もあり、講談や漫才などの演芸だけでなく、旅芸人の一座による芝居も行われていました。雪敷きの客席の中央を、板子戸の花道が通り、演者と身近に接することができたのです。

「江戸っ子だってねえ」^{すし}「神田の生まれよ」^{うし}「飲みねえ、鮎食いねえ」^{しほずのじろちやうでん}「いまつさんいくくびがぶうちやう」^{いしまつさんいくくびがぶうちやう}（『清水次郎長伝／石松三十石船道中』）の名ゼリフで知られる、昭和の浪曲界の名人・2代目広沢虎造は、白金の出身でした。もともと旋盤工として働いていたのですが、『白金演芸館』で浪曲を聴いたことが、その道に進むきっかけになったそうです。



コラム9 ● 「青バット」の大下弘

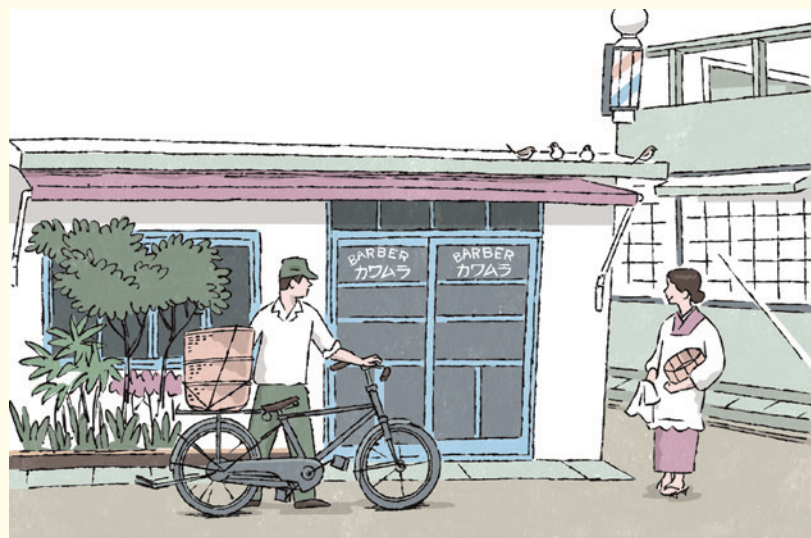
青色のバットを使用したことから「青バットの天下」として人気を集めた、戦後プロ野球界を代表する名選手。大学野球が盛んだった時代に、「赤バットの川上哲治かわかみてつはる（東京巨人軍）」「物干し竿の藤村富美男ふみお（大阪タイガース）」などのライバルたちとともに、プロ野球を盛り上げていきました。あまりにも打球を簡単そうにポンポンと打つことから「ポンちゃん」というあだ名まで付きます。戦争によって休止されたプロ野球が、昭和20(1945)年秋に復活すると、新球団セネターズ（後の東急フライヤーズ）に入団。翌年には本塁打王となり、その後も華々しい活躍を続けました。高く美しい軌道を描くホームランは、天性のものといわれ、河村さんのような野球少年たちから、絶大な人気を集めたのです。



河村さんの物語

Story of My Life

朝早くから響くアサリや納豆の〈物売り〉の声
静かだった東京には、いろいろな音が聴こえていました



河村さんの子どもの頃は、独特の売り声を掛けながら商売をする〈物売り〉の人を、よく見かけたそうです。

「たとえば朝早く、貝を入れた丸い竹かごを自転車で積み上げて、「アサリ〜シジミ」、アサリハマグリシジミよ〜」なんて節回しで呼びわたりながら、千葉の浦安あたりから貝売りがやってくる。やつぱり朝が早いのが、「ナット、ナット、ナット」と声を張りあげ売りにくる、納豆売りの少年。そういった物売りの声が、目覚ましがりでした。大森や蒲田の方からは、ワタリガニを売りに来たかな。おもしろいのは、煙管の修理や掃除してくれる、羅宇屋さん。ヤニを取るためにボイラーの蒸気を使い、屋台の煙突についた笛が「ピーッ」と高い音を出します。あの頃は、今より街の騒音も少なかったんで、遠くの音もよく聴こえました。品川駅で列車を連結する音や汽笛の音が、このあたりまで響いてきたんですよ」



道路でキャッチボールをする小学2年生の頃の河村さん



愛用のグローブと巨人軍時代の王貞治選手のサインボール



写真を見ながら自身で手縫いした大下弘選手のユニフォーム

レーヤーです。自分の名前にも同じ字が入っているし、今の^{おおたしやうへい}大谷翔平選手みたいによく打つ選手で、本当に大好きでした。自分も野球選手になりたいと憧れて、小中学校では野球部に入りました。

山崎——道真はどうされたのですか？

河村——グローブは、母が夜なべして手縫いで作ってくれました。キャッチャーマスクは、剣道の防具を利用してね。とにかく物が無い時代だったから、いろいろ工夫をしたものです。

山崎——今は、大谷翔平選手を応援してい

らっしゃるそうですね。

河村——店のお客さんが「マスター、そんなに野球が好きなら一緒に行かない？」と誘ってくれて。なんと、ドジャースの本拠地のロサンゼルスへ旅行ができたんですよ。そんなうれしいことがあると、ここまで続けてきて良かったと心から思います。

実は今は、娘たちがあらためて理容を学び直して、妻と一緒に店に立ってくれてるんですよ。私にはない新しい技術やセンスを取り入れて、4代目として、これから無理容店を続けてくれるんじゃないかな。

河村さんからのメッセージ

戦争が終わってすぐの頃、葬儀のために、祖父が福井まで私を連れていったことがありました。宿はなく、持参した布団にくるまりながら、駅の地下道で寝るんです。北陸線で戻る時、客車が足りず、貨物列車に寄せられたんですが、扉を閉められると、内側から開けられず、降りることもできない。ある女性が岐阜で降りたかったのに、名古屋まで扉が開かなくて、泣いて悲しんでいました。トイレもないから、私も下着を汚しちゃったのか、祖父が品川の駅で洗ってくれたのを覚えてます。戦争では、子どもや女の人やお年寄りといった人たちが、とくにつらい目に遭います。今のウクライナやガザでもそうです。若い人たちには、平和な国、平和な時代に生まれたことの意味を、しっかり受けとめ、考えてほしいと思いますね。

まわりで燃える焼夷弾の火を 端からスコップで叩いて 一生懸命に消しました

白金で、祖父の代からの植木屋の家に生まれた高橋雅雄さん。10歳で太平洋戦争の開戦を知っても、勇ましい新聞報道などから、日本は大丈夫と考えていたそうです。しかし戦局は悪化し、3月10日の大空襲で自宅が焼け、やがて動員された軍需工場も焼失。それでも国のために働けば「豊か」になると信じていました。戦後は公園計画などの仕事を通して、緑を中心とした文化的な都市づくりに注力。「本当の豊かさ」とは何かを考え続けた高橋さんの言葉に、高校生たちが耳を傾けます。

戦争体験者

高橋雅雄（たかはし・まさお）さん（94歳）



昭和5（1930）年、白金三光町（現・白金台）生まれ。『植春』を屋号とする造園業の3代目で、一人っ子。祖父（春吉）も父親も、植木職人だった。10歳のときに太平洋戦争が始まる。昭和20（1945）年3月、いわゆる東京大空襲（下町だけでなく、芝区なども標的とされた）によって自宅を失い、近くへ移り住む。勤労働員で、都内の工場で働いた。高校卒業後、千葉大学園芸学部造園学科へ進学。卒業後は、建設省の推薦もあって神奈川県庁土木部計画課へ就職、都市公園や景勝地の整備に携わる。退職後も、専門学校などで造園文化論^{きょうぶん}の教鞭を執った。

interview

高橋雅雄 さん

撮影場所 ● 有栖川宮記念公園

昭和9（1934）年11月より一般に開放された高橋さんお気に入りの公園。太鼓橋にて。



小林洋太（こばやし・ようた）さん

佐藤碧（さとう・あおい）さん

緑が多くのどかだった白金で
チャンバラごっこで遊んだ少年時代

小林——最初に、戦争が始まる前のことを教えてください。住んでいたのはどんな場所でしたか？

高橋——白金三光町と呼ばれた地域です。聖心女子学院の壁沿いに続く、蜀江坂しやうかうざかのふもとにありました。東京の中でも家はまばらなほうでしたね。戦後に聖心女子大学が広尾に移って、今は高等部までしかありませんが、当時は広い森に校舎やグラウンドがあり、緑の多いところでした。

ヨーロッパの映画に出てくるような黒い服を着た西洋人のシスターさんたちも住んでいて、食事に必要な牛乳を得るため、校内で2頭の乳牛も飼われていました。

佐藤——白金台に牛がいたんですね。

高橋——そうですね。乳搾りのおじさんの子どもが小学校の同級生だったので、よく遊びに行きました。搾りたての牛乳も、そ

こで初めて飲ませてもらいましたよ。

北里研究所があるあたりもまだ大学はなく、まわりには住宅が点在して、道沿いには店が並んでいました。毎月9のつく日には縁日が開かれていました。日が暮れると夜店が出るんです。バナナの叩き売りたたきうり（軽妙に喋りながらバナナを売る）や金魚屋、焼きそば屋、植木屋……。カーバイドという薬品で灯りあかをともし、夜の8時や9時までやっている。子どもたちは親から小遣いこづかいをもらって夜店に行くのが楽しみでした。

小林——ふだんはどんな遊びをしましたか？

高橋——北里研究所のあたりは土地が低くて、道路を隔てた反対側からは傾斜地になっているんです。私はその斜面にあった神応しんのう小学校に通っていました。斜面は段々になっていて、住宅があるところ以外は野原です。皆でその段々にサクラ山とかタヌキ山とか名前をつけ、今日はここに集まろうと決めてはチャンバラごっこなどしていましたよ。



はっぴ姿で初孫を抱く高橋さんの父。
昭和36(1961)年



有栖川宮記念公園 太鼓橋
(出典：『東京市公園概況』昭和11(1936)年、提供：東京都立中央図書館)

佐藤——今インタビューをしている有栖川宮記念公園でも遊んでいたんですか？

高橋——ここは、私が生まれる少し前に

できた公園です。小さい頃、池袋に住む母方の叔母がよく、どら焼きやケーキを持って家に来ましたが、その時に連れてきてく

れた場所。とても懐かしいです。

小林——ご実家はどんな暮らしでしたか？

高橋——祖父も父も植木屋でした。木を売るのではなく、庭師、つまり造園業です。財界の人のお屋敷の庭などを広く手がけていました。その頃は都心にも造園屋さんは多かったんです。うちは父が一人親方で、従業員は持たず、土を掘ったり木に登ったりする職人をそのつど集めていました。働いた分の報酬を渡すのは母の役目。どの職人がどこに行って仕事をしたかノートに丁寧に記録していました。職人は朝、現場に行く前にうちに集まります。冬は寒いから焚き火たき火をしますが、小学校に上がる前から、そこで職人さんたちから聞く話がとても面白かったですね。父は頑固



者で、職人を叱り飛ばすのが怖かった。けれど成長してからわかりましたが、職人はまだ一人前でない間は、先輩の言うことを聞いて、叱られて育つものなんですね。

父は忙しいので、祖父によく遊んでもらいました。私のために家の空き地にセメントでひょうたん形の池を作り、金魚や亀、メダカなどを入れてくれました。

小林—— 小学校ではどのような授業が印象に残っていますか？ 今と違うことはありませんか？

高橋—— 国語、理科、算数などは今と同じ科目ですが、違うのは書道でしょうね。先生が黒板に大きな水筆で書くのをお手本に半紙に書きました。墨をするのも、心を込めて真っ黒になるまですれと言われました。私は上手ではなかったですが書道は好きでした。それは、後でお話する高校時代のアルバイトにもつながっていますね。

「日本は本当は負けているよなあ」と友だちとこっそり話していました

小林—— 戦争が始まったのを知った時はどんな気持ちでしたか？

高橋—— 10歳の時に新聞やラジオを通して知りましたが、正直に言ってもあまり何も感じませんでした。日中戦争の頃から、千人針などをしているのは見ていましたが、日本の陸海軍は強いと教え込まれていましたし、その後も満州や朝鮮半島などで日本軍が戦果を上げた報道ばかりなので大人たちも不安は感じていないようでした。子ども心にも日本軍は頼もしいと思いましたし、よい方へよい方へと捉えていたのをなんとなく覚えています。

佐藤—— だんだんと戦況が悪くなっていくのはわかりましたか？

高橋—— 国内の報道は、南方のどこの島まで攻めたとか、日本優勢を伝えるばかりで、安心していったんです。しかしその島がア

メリカに取られたという報道もされるようになり、負けたとは言わないんですが、「本当はどうなのか」「様子がおかしい」……と皆が徐々に疑いを持つようになっていきます。そのうちアメリカ軍はほとんど日本列島に近づき、空襲も始まりました。

佐藤—— そんな中で学校でも戦う訓練が始まったんですね。

高橋—— 軍事教練は市立八中（現・小山台高校）に入ってから始まりました。各学校に配属将校（教練のために学校に派遣された将校）がいて、戦場で必要なことを教えるんです。弾の入っていない古い三八式歩兵銃というのが皆にあてがわれ、銃の手入れの仕方や、匍匐（はふく）（腹這いになって進む）訓練、ゲートル（膝から下に巻く布）の巻き方、負傷兵の運び方、整列行進など、兵隊さんがやることを一通り教えられました。怒鳴るような怖い教官ももちろんいましたよ。

佐藤—— みんな素直に訓練を受けていたので



軍事教練を受ける学生。左奥に配属将校とみられる人物がいる（提供：共同通信社）

コラム 10 ● 軍事教練（ぐんじきょうれん）

日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦など、いくつかの戦争を重ねるなか、より大規模な総力戦に備えて、学校教育の中へも軍国主義が取り入れられていきます。大正14（1925）年の陸軍現役将校学校配属令により、軍事のための教育・訓練が中等学校以上の教育機関に正課として行われることになり、以降その対象が順次広げられて、昭和14（1939）年には大学でも義務化されました。男子が対象で、軍隊での行動規律や、射撃、手旗信号、銃剣術などの訓練を、旧式の銃器や模擬銃などを使いながら、陸軍から各学校へ配属された将校によって施されたのです。また、戦況の悪化に伴い、女子生徒や、小学生にあたる国民学校の児童などへも、同様の訓練が行われるようになりました。

しょうか？

高橋—— それしか心のよりどころがなかったんです。戦地では男性たちが戦っている、内地では女性が銃後を守り、子どももお国のためにできることをしなければならぬ。それが当たり前のことでした。国の方針に反すれば国賊と言われ、警察や憲兵に怒られます。変だと思っても公には言えません。友人とは「日本は本当は負けて攻められているよなあ」などこっそり話していました。

佐藤—— 昭和20（1945）年3月10日の大空襲の時のことを教えてください。

高橋—— その日は北風が強い日でした。夜、B29が4機頭上に飛んできたのを覚えていいます。飛行士の顔まで見えた気がするほどの低空飛行で、焼夷弾をバカバカ落としていきます。焼夷弾の中身は油なので、落ちる途中で何かに付着すると火が出るし、着弾した地面でも燃えます。私はまわりで

※東京大空襲時のB29の高度は2000メートル



燃える火を端からスコップで叩いて一生懸命に消しましたが、北風による火の回りはあつという間でした。近くの木造家屋が燃え上がり、神応小学校からも火が上がってきて、熱気もすごかったので、もうこれはダメだ、と祖父や両親とともに、普段は一般に開放していなかった伝染病研究所（現・東京大学医科学研究所）へ逃げて、夜が明けるまでそこで過ごしました。家からは何も持ち出せませんでした。水をかぶることもできず、熱い中を走ったことを覚えています。

小林——「自宅はどうなったのですか？」

高橋——夜が明けて戻ると、自宅も近所の建物も全部燃えてぺしゃんこ。炎がぼろぼろ残っているだけでなんにもない。造園の道具なども残っていませんでした。

小林——その時どう思われましたか？

高橋——親たちはこれからどうするのだろうと思いましたが、それを口にするのさへはばかれたね。ただ、これからどんなに苦しくても一家で生活していけるなら我慢しようと思いました。

その後、引っ越した先は木造2階建て長屋で、ここもまたすぐに空襲で燃えてしまっただろうと言いながら借りて住みました。ところが意外なことにそこは燃えなかったの、戦後に買い取って建て替え、今もその場所に住み続けています。

小林——当時、防空壕はなかったのですか？

高橋——それぞれの家で作っていて、平らな場所なら木材や鉄骨、トタン板などで組んで土をかぶせ、斜面なら横穴を掘るなど皆さん工夫していましたが、直撃されたら燃えるだけ。あまり意味はなかったですね。

軍需工場で聞いた玉音放送は意味もよくわかりませんでした

小林——疎開はされましたか？

高橋——空襲後の春から中学2年になり、軍需工場に動員されたので疎開はしません

でした。

佐藤——どういう仕事をしていたのですか？

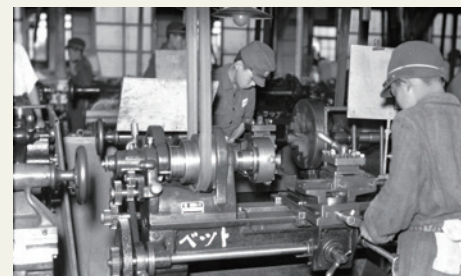
高橋——生徒はいくつかの班に分かれて動員され、私は最初は25人で西小山駅のそばの日満工業という鉄工所に行きました。旋盤で鉄を削って何かの部品を作る作業です。全くやったことのない仕事ですし、何を作っているのかもわからない。職人さんに言われる通りにしていましたが、不合格品も多く、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。そこが空襲で焼けてからは、多摩川沿いの別の工場に配属されましたが、そこではほとんど雑用ばかり。工場がグラマン戦闘機の機銃掃射を受け、皆で建物の陰に隠れたことも幾度もありました。

小林——玉音放送はどこで聞かれたのでしょうか？

高橋——工場にいた時ですね。8月15日に大切な放送があるからとラジオの前に集められました。でも音声の質が悪く、何を

コラム 11 ● 軍需工場（ぐんじゅこうじょう）

軍事に必要な物資を生産・修理する工場のことで、銃砲や弾薬、車両や航空機、艦船などの兵器や、軍用の衣料や食料などを扱いました。戦時下の日本では、軍が直接管理する場合を「工廠」や「造兵廠」と呼び、民間へ発注する場合を「軍需工場」と呼んでいます。昭和18(1943)年には、とくに航空機の増産を目的として「軍需省」が設置され、「軍需会社法」で指定された軍需会社には、原材料、資金、労働力、動力などが優先的に割り当てられることになりました。これらの工場へは、労働力不足を補うために、中等教育以上の学生や生徒たちも数多く動員されていたため、戦争末期には空襲の標的とされ、大きな被害を受けることになったのです。



日立亀有工場で旋盤の使い方の訓練を受ける少年たち。昭和17(1942)年8月(提供：毎日新聞社)

言っているのかよくわからなかった。でも周囲の大人たちは悲しそうな顔をしていて、何かあったことだけはわかりました。

小林——戦中戦後は、食べ物などはどういう状況でしたか？

高橋——戦中は米も配給制でなかなか手に入りません。父は、魚を食べると残った骨を火鉢に埋め、熱でカリカリになったのをよく私に食べさせてくれました。おかげで今も骨が丈夫です。母も食べ物を得るには苦労していました。貴重品や反物をサツマイモなどと交換してもらったために、埼玉の農地へ何度も一緒に行きましたね。それから目黒区には、米や野菜を作っている農家があり、荷車で野菜を売りに来て、帰りに肥料にする人糞を桶や樽に入れて持って帰っていくのです。人糞を渡すと次に来たときに野菜と交換できる券をくれるので、大事に溜めておきました。

佐藤——戦争が終わって、勉学に戻られたん



ですね。

高橋——家業の道具も焼け、家は貧乏でし
たから学費もまかなわず大変で、いろいろ
なアルバイトをしました。学制改革により、
大学へ進学するには試験が必要となり、私
は家業のこともあって園芸を学問として勉
強したかったので、当時は日本で唯一、食
べるための農業ではなく造園や景観を学べ
る、誕生したばかりの千葉大学の園芸学部
造園学科へ進学することにしました。

小林——その学費もご自身で？

高橋——小学校の書道の授業以来、字を
書くのは好きでした。それで、高校時代か
らガリ版に文字を書くアルバイトをしてい
たんですよ。

佐藤——ガリ版って何ですか？

高橋——ロウ引きした薄紙に鉄筆でガリガ
リと文字を彫り、ローラーに油性インクを
つけて刷るんです。当時はコピーもプリン
ターもなく、小学校のテストなどはみなガ

リ版印刷でした。役所などでは大量の資料
を作るため、大勢のガリ版書きが必要でし
た。誰が書いても同じに見える読みやすい
字を書く技術が求められますが、それが性
に合っていたのか、大学の学費を払っても
おつりが来るほどのいい収入になりましたよ。

佐藤——大学卒業後は神奈川県に就職され
たんですね。

高橋——入庁してすぐに湘南海岸公園の
計画をして、その後もさまざまな都市計画、
緑地計画に携わってきました。親たちがし
ていた造園の仕事とのつながりを思っ
て就いた職です。都市に緑がいかに必要かとい
うことに取り組み続けてきました。それは
心の豊かさの表れであり、文化です。

退職後はあちこちの学校で造園を教えて、
今、教え子は全国で活躍しています。彼ら
の仕事を見るのも楽しみです。

高橋さんからの メッセージ

今、戦争の気配が世界各地に広
がっています。若い人たちにも、
平和とは何かを真剣に考えてもら
うことが必要だと思います。私た
ちの10代は戦争に翻弄される毎日
でした。一人ひとりに違う体験があり
ます。そうした話を通し、戦争は決し
てあってはならないとわかってもらい
たいのです。

私は小学生の頃に知った「克己」(こつぎ)
の欲望に負けないこと、そして県庁時代に
知事から聞いた「二度とない人生だから」
という2つの言葉を胸に、少しでも人
のために役立つようにと生きてきまし
た。それはやはり、戦争の悲惨さを見
てきたからです。若い方々にはこれから、
社会のため、人々のためになることを
していただきたい。そして自分だけ
なく他者の幸せも含めた、平和で豊か
な世界を作ってもらいたいです。

高橋さんの物語

Story of My Life

“生きる”ことの本質を教えてくれたのは
屋上で育てる500株ものサボテンです



高橋さんの趣味はサボテンの栽培。2階建ての
自宅の屋上で、約500株ほどを育てています。

「サボテンは暑く乾いた砂漠にも、3000メー
トルもの高地にも育ちます。乾燥期はじつとして
いて、雨季が来ると一斉に水を吸い上げて花を咲
かせる。雪に埋もれても、綿毛をつけながら生息
する種もある。私はそれぞれの環境に調和し、見
事に生きるその強さを美しいと感じています。人
間もまた、苦しい時は耐え、順調な時は精いつ
ぱい社会に貢献するのが、あるべき姿ではないで
しょうか。サボテンから私は、人間の生き方を教
えられたような気がします。自然の摂理に反して
はいけないんです。都市の緑化も、自然のあり方
に添ったものでなければと思います。」

サボテンの寿命は長く、世界には樹齢300年
以上のものもあります。長い年月、自然と共存す
るサボテンに対して、人間は何をしているのだろ
う。そんなことを考えながら毎日サボテンと向き
合っているのです」



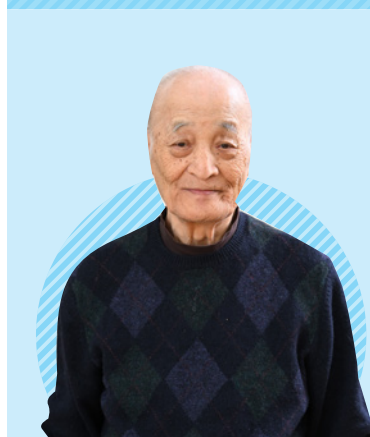
芋で作った^{あめ}飴を運び 闇市の問屋で売りさばいたお金で 家族みんなが生き抜いたんです

太平洋戦争のさなか、日本の各地を転々としながら、戦況の変化を感じていた子ども時代。

空襲に追われ、国が嘘を重ねるなかで、どんどん深刻になっていく食糧事情は、戦後さらに混乱をきわめます。大鍋で煮た飴を釘に掛けて^{くき}晒し闇市で物々交換をする、その親族総がかりの飴作りで糧を得ることが、武さんたちの暮らしを支えました。父も母も子どもたちも、それぞれが懸命に働いて生き抜いた鮮烈な日々。記憶は、若い世代の聞き手たちにごう響くのでしょつ。

戦争体験者

武恒雄（たけ・つねお）さん（90歳）



昭和9(1934)年、福岡県生まれ。^{ていしんしょう}逓信省の簡易保険局に勤める父親の転勤のため、家族で福岡、東京、仙台と短期間の引っ越しを繰り返しながら育った。仙台で終戦を迎えた後、父親が退職。東京・矢口の親戚宅に身を寄せ、飴作りで生計を立てる。学業を終えると郵政省の東京郵便局に入局。定年退職後、お台場に住んだことをきっかけに、「港区立生涯学習センター(ばるーん)」に通うようになり、戦争体験を伝える「港区語り部の会」では初期メンバーとして90歳の今も活動を続ける。

interview

武恒雄さん

撮影場所 ● 港区立生涯学習センター（ばるーん）

〈港区語り部の会〉は月に2回ほど集まり、昔の暮らしや戦争体験を伝える活動を続けている。



笠畑里紗（かさばた・りさ）さん

齋藤ジェイソン（さいとう・じえいそん）さん

藤田睦月（ふじた・むつき）さん

校舎や校庭はコンクリート 「東京の学校は違うんだ」

笠畑——福岡でお生まれになったそうですね。

武——西新（現・早良区）という、福岡市の古くからの住宅街です。近くには修猷館高校や西南学院大学など、学校が多い街もありました。

ただ、親はどちらも関東の人なんですよ。

笠畑——では、転勤で九州へ？

武——東京生まれの父が、簡易保険局（国が行っていた生命保険を扱う組織。現・かんぽ生命）に勤めていたんです。母と結婚すると同時に福岡局へ転勤になり、そこで私が生まれました。4人きょうだいの長男です。

笠畑——お母さまは、どんな方ですか。

武——茨城の江戸崎（現・稲敷市）の大地主の娘でした。その父、つまり私の祖父が東京で通信省（郵便や通信などを管轄する、簡易保険局の上位組織）にいて、そこでごうやら父

を見初め、「うちの娘をもらってくれ」ということになったらしい。つまり、母はかなりのお嬢さん育ちだったんですね。

笠畑——福岡では、どんな子ども時代でしたか。

武——通ったのは西新国民学校（現・西新小学校）で、子どもの足で30分ほどかかったかな。途中に刑務所（旧・福岡監獄）があつて、高い塀がずっと続く脇を歩いて向かうんです。ときどき、赤い服（当時の囚人服）を着た人たちが、畑仕事をしているのが見えましたね。

笠畑——太平洋戦争の開戦は覚えてますか。

武——あまり記憶にないですよ。「朗々とした歌声で」守るも攻むるもくるがねの〜」なんて歌（軍艦マーチ）が流行っていたのは覚えてますが。なんだろうなあ、たぶん、真珠湾や東南アジアの方でもう戦争は始まっていたけど、本土が爆撃されるのはもっと後のことだから、日本は戦争をしてるんだと

いう気がしなかったのかもしれないね。

笠畑——その後、東京へ引っ越されたそうですね。

武——父の転勤で、小学2年の1学期に東京へ来ました。住んだのは、神楽坂にある赤城神社を下ったあたり。三軒長屋でした。

父に連れられて神楽坂の映画館へ行き、真珠湾攻撃の「九軍神」（潜航艇に乗って戦死し、その後に軍神として祀られた将兵のこと）の映画を観たのを覚えています。

笠畑——転校した学校はどんな印象でしたか？

武——市谷国民学校（現・市谷小学校）なのですが、いちばんびっくりしたのは、校舎が鉄筋コンクリートの3階建てで、校庭もコンクリート敷きだったこと。西新では、木造の校舎に土のグラウンドだったんで、「東京の学校は違うんだ」と思いましたね。

笠畑——クラスはどんな感じでしたか。

武——はじめに座らされたのは、教室の

藤田——仙台でのお住まいは、どんなところでしたか。

武——宮城野原といって、市街地からは少し離れた住宅街にあった市営住宅です。近くに、陸奥国分寺の古いお堂がありましたね。南小泉国民学校（現・南小泉小学校）へ入ったんですが、途中に小川（七郷堀という農業用水）が流れていて、そこに生えているグミの実やスカンポ（イタドリ・スイバ、若芽が食用になる）を採って食べながら通いました。グミの実の実は甘く、スカンポは、茎の筋を外して中身の柔らかいところを食べると酸っぱい味がします。食べる物がほとんど少なくなってたんで、そういうものをおやつにしていたわけです。

藤田——食糧は手に入らなくなっていたのですか。

武——配給だけじゃとても足りなくて、庭に野菜を作って食べてましたよ。

藤田——仙台でも空襲があったとか。



いちばん後ろの席。すると、隣にいた子が「おい、いちばん前に空いている席があるのは、なんでだか知ってるか？」と言ったんです。「知るわけないだろう」と答えたら、「あそこは中村メイコ（2歳で映画デビューした天才子役で、近年まで86年にわたり活躍した女優・タレント）の席なんだ。1回も学校に来たことはないけど、席だけはある」って。本当かどうかわからないけれど、クラスの子はみんなそう信じてるみたいでした。

笠畑——友だちとはどんな遊びをしましたか。

武——校舎でかくれんぼをしたのは覚えてるけど、校庭ではどうだったかなあ。なにしろ、いくらもしないうちに、また父が転勤になり、一緒に仙台へ引っ越してしまつたものだから。その頃は、東京では空襲が激しくなっていたんで、保険証書など大事な書類を東京から各地方へ移す目的があったようですね。

武——艦載機（艦上機）^{かんざいき}といって空母から飛んでくる小型機が、機関銃を撃ってくることはときどきありました。空襲警報が鳴ると、防空壕に逃げ込んだり、通学途中なら土手に逃げ込んだりしたものです。

いちばん大きかったのが、昭和20（1945）年の7月10日の仙台空襲。爆撃されたのは仙台的市街地で、私たちの家からはいくらか距離がありました。庭に掘った防空壕に入って、仙台駅の方の空が赤く染まっているのを、おびえながら見てたんです。次の日に学校へ行って、用務員さんが空襲で亡くなったと知りました。

藤田——玉音放送は、聞かれましたか。

武——何を言っているか、ぜんぜんわからなかった。まわりの人も、泣いたり怒ったりはしてなかったですね。たぶん大人たちも、戦争が終わってほっとしたんじゃないでしょうか。

B29の激しい爆撃で焼け野原と化した仙台。昭和20年9月18日撮影（提供：昭と館、所蔵：米国立公文書館）



内幸町にあったNHKでラジオ番組の収録に立ち会う

笠畑——戦争が終わって2年してから、東京へ戻れたそうですね。

武——父が簡易保険局を辞めてしまい、仕事を探して仙台と東京を往復してたんですが、戦後の混乱期ですから、なかなか見つけれなかったんです。やむなく東京の親戚の家へ、家族5人でひとまず身を寄せることになりました。小学5年から6年の時だったと思います。

父は、三男一女のきょうだいだったんですが、いちばん上の伯父が、目蒲線（現・目黒線）と池上線の間の矢口にある実家を継いでいました。ここがたいへん広い家だね、もとの長男一家に加え、岡山から引き揚げてきた次男坊の一家、続いて三男坊である父と私たち、さらに親戚のおじいさんとおばあさんという、合わせて4世帯がしばらく一緒に生活できるほどだったんです。

笠畑——その家は空襲に遭わなかったのですか？

武——あのあたりも「取り壊し（予防的に建物を取り壊して防火帯を作る、建物疎開のこと）」が多かったのですが、幸いまぬがれ、昭和20年4月15日の城南空襲でも、ちょうどぽっかり焼け残ったのだと聞いています。

笠畑——そんな大所帯だと食事もたいへんでは。

武——粒の見える白いご飯なんでもちろん食べられず、お米があってもせいぜいおかゆ。たいていは、すいとんを食べてました。パンも、今のようにはなく、いろいろな混ぜ物で色がついてましたね。

笠畑——子どもが多くて、お母さんは苦労されたでしょうね。

武——なにしろ、たいへんなお嬢さん育ちでしたからね。皮をはぐように着物を売っていくタケノコ生活で、初めて指輪を質屋に入れようとしたとき、自分では行けなく

で、子どもの私が行かされた記憶があります（笑）。

そんな母も、さすがに背に腹は代えられなくなったのでしょう。生活のために、大森や蒲田のお屋敷へ通って、お手伝いさんを始めました。印象に残っているのは、バンドネオン奏者の北村維章さん（^{きたむしりあき}東京シンフォニック・タンゴ・オーケストラ）などを率いて日本に



タンゴブームを起こした 宅で、お子さんの世

話をしていたこと。中学生の私も、日劇（日本劇場の略：有楽町にあった大劇場）まで北村さんの楽器を運んだり、内幸町にあったNHKでラジオ番組『ひるのいこい』の収録を見学したりしたものでした。

笠畑——ご家族で、**飴**を作っていたこともありますが。

武——伯父の長男、つまり私の従兄が軍隊から帰ってきて、友だちと始めたのが飴屋の仕事。これが当たったんで、職がなかった父も一口乗ることになり、私も手伝うようになったわけです。

矢口の家の中に作業場を建て、仕入れて来た芋飴（サツマイモと麦芽から作った飴）を、大きな鍋で煮るんです。そうして溶けた飴を、壁の犬釘（先端がし字に曲がった大きな釘）へ引っかけて長く伸ばす。そうやって晒すと、空気が入って飴が白く柔らかくなっていくんですよ。これを何度も繰り返してか

ら棒状にして、トントントンと一口大に切って、小さな飴をこしらえる。

□に入れた時にサラッと溶けるこの「晒し飴」を、錦糸町や上野、日暮里あたりの飴の問屋へ持ち込むと、それはもうよく売れたんです。砂糖を使っていない、芋の素朴な風味の飴なんだけど、みんな甘い物に飢えている時代でしたから。

笠畑——問屋街は活気がありそうですね。

武——駅前にマーケットができて、問屋も多かったんですが、近郊からたくさんの方が集まって、あらゆるものが取引されてました。晒し飴を売ったお金で、食料や物資を買うことによって、私たちは生き抜いたんです。そのうち砂糖の配給が再開されたんですが、「砂糖だけじゃ腹の足しにならない」と手放す人も多かったそうです。父や母は、大森の山王あたりのお金持ちから砂糖を少しずつ集め、まとまったところで飴問屋に持ち込むこともしてたそうです。

コラム 12 ● アメ横（あめよこ）

駅周辺に屋台が広がる闇市のなかでも、上野や錦糸町、日暮里などには、菓子類を扱う問屋が多く集まったので、武さんたち家族も、そのような問屋街を回りながら、晒し飴を売っていたのでしょう。

とくに、東京の北の玄関口だった上野から御徒町の周辺では、仕入れた飴を東北地方などへ鉄道で運び、高値で売りさばくことができたため、数百軒もの飴屋が形成され、これが、アメヤ横丁（「飴屋通り」という名を生んだようです。その後、朝鮮戦争の勃発により軍需物資への需要が急増し、米軍の物資が大量に放出されたため、これらを扱う店舗も増え、アメリカ横丁（「アメリカ通り」とも呼ばれるようになりました。「アメ横」という名の二つの由来です。



上野アメヤ横丁
JR御徒町～上野のガード西側にある商店街には、イモアメ屋が並んでいた。昭和28（1953）年5月撮影（提供：毎日新聞社）

戦争体験を通じて 若い世代へ伝えたいこと

齋藤——今は「港区語り部の会」を通して、

「担ぎ屋」の人も大勢いましたよ。そんな生活を、小学6年から中学2年あたりまで、3年くらい続けたかなあ。



主食取り締まりで検挙された担ぎ屋。日暮里駅（提供：毎日新聞社）

コラム 13 ● 担ぎ屋（かつぎや）

生産地から食料などの荷を担いで来て売る人のこと。戦況の悪化で物資が極端に不足した、戦争末期から戦後の混乱期にかけては、いわゆる闇物資が配給品の欠乏を補うことになりました。多くの方が近郊へ出かけ、物々交換などによって農作物や海産加工品を仕入れてきますが、自分たちで消費しない分については、闇市や近所で売りさばくようになり、次第にそれが仕事になっていくこともあったのです。また、復員した兵や軍需産業の失業者、旧植民地から引き揚げてきた人たちが、なりわいとすることも多かったようです。これらの行為は違法とされ、運ぶ途中で経済警察による取り締まりを受け、物資を没収されるだけでなく、刑罰を受けることもあり、たいへん危険な仕事でもありました。

経済調査庁・日本国有鉄道が、米や穀物などの主食や闇米の輸送禁止を呼びかけるポスター（提供：昭和館）



戦争体験を地域の子どもたちへ語り続けておられますね。

武—— はい、微力ながら。

齋藤—— そうした活動のなかで、若い世代へとくに伝えたいことは？

武—— 戦争体験といっても、子どもだった私は、実際に戦場へ行って鉄砲を撃ったわけでも、弾丸が飛んでくる場所にいたわけでもありません。それでも、食べる物にはやはり苦労をしたし、空襲で燃える火が自分の家の方まで広がってきたらどうしよう、とおびえた経験もしています。戦争なんて、 अच्छいけないことですよ。若い人たちにも、そんな強い思いを心の戒めとして持っていたきたいんですよ。

藤田—— 教科書だけではわからない歴史を、教えていただけように思います。日本人の考え方や行動の仕方が、その頃と今とでどう変わって、何が変わってないんだと、考え直すことができました。

齋藤—— 細かいこともたくさん話してもらえたので、「そんなに大変だったんだ」というリアリティを感じることができました。

笠畑—— これまで戦争について持っていたイメージが、さらに広がった気がします。これからもいろいろな方のお話を聞いて、皆さんの体験を大事に語り継いでいきたいと思います。

武—— そんな立派な感想をもらって、赤面の至りです（笑）。私自身はもう年ですから、皆さんのような若い人たちが頼り。どうぞよろしくお願いしますね。



武さんからのメッセージ

福岡から東京へ来たのは、ちょうど本土でも空襲が激しくなった頃。疎開先の仙台では、アメリカの艦載機がたびたび日本の上空を飛ぶようになっていました。それを見上げながら、「日本軍は、もう敵機を迎え撃つこともできないのか」と、子ども心に思わないでもなかったけど、そんな疑問を、口にするのはおろか、考えることさえ許されない世の中だったので。しかし、無理にでも日本は勝つと信じて戦争を続けた結果、広島と長崎に原子爆弾まで落とされてしまった。愚かしいことです。もちろん落とされたアメリカが悪いのだけど、落とされるところまで戦争を引き延ばしたとも言える。私は、そう思っています。若い人たちには、「おかしい」「知りたい」という自分の気持ちを大切にしてい、いろいろな意見を聞いて、自分で考える人になってほしいですね。

武さんの物語

Story of My Life

引っ越しと転校を繰り返した子ども時代
「自分には故郷がない」と感じてたけれど、
ようやく居場所を見つけられました



福岡、東京、仙台、再び東京。各地を移り住んできた武さんには、ここへ帰りたい、と思える場所がなかったそうです。

「つまり、自分には故郷がないということ。それってやっぱりちょっと寂しいな、と感じてたんですよ。ところが、仕事を辞めてから、旧・桜田小学校の校長先生に誘われて、〈港区立生涯学習センター〉に足を運ぶようになりました。いろんな人たちがいるんですが、なかでも、私と近い世代の人たちが集う、〈港区語り部の会〉に参加させてもらうようになったんです。

昔の暮らしや文化、遊びなどを伝えていくために、『みなと新橋今・むかし新聞』という壁新聞を発行してるんですが、もうひとつ関わっているのが、紙芝居の上演です。戦争中の経験をもとに、メンバーの方が制作してくれた『みよちゃんの集団疎開』という紙芝居で、ナレーションをお手伝いしています。実は若い頃に、職場の演劇部で舞台に立ってて、発声練習をした経験が、思いがけず役立ちました」

いつでも白いご飯を 好きなだけ食べられる そんな幸せなことってないんですよ

飲食店がひしめき、サラリーマンの聖地とも呼ばれる新橋。でも、戦前の新橋は小売りや職人の店、問屋などがずらりと並び、どの家にもたくさん子どもがいる、今はまったく異なるたたずまいでした。

その一角に室内装飾のお店を構えていた実家から、中嶋さんは近くにあった桜田国民学校へ通いますが、すぐに戦況は悪化。お菓子はおろか、お米すら手に入らなくなっていく心細さは、幼い中嶋さんの心に深く刻まれたのです。いつでも白いご飯が食べられる自由、希望すれば海外で見聞を広められる自由を、どうか大切にしたいと学生たちに語りかけます。

戦争体験者

中嶋房子（なかじま・ふさこ）さん（88歳）



昭和11(1936)年、田村町(現・西新橋)生まれ。実家は、室内装飾用のカーテンをオーダーメイドで仕立てる裁縫業を手広く営んでいた。5歳の時に太平洋戦争が始まり、空襲が激しくなるなか、母方の親戚がいる茨城の笠間へ疎開をする。戦後も、新橋周辺の治安に不安があったため笠間にとどまり、中学1年の2学期に東京へ戻る。昭和33(1958)年に、貿易会社に勤める夫と結婚。3人の子どもを育て、孫は5人、ひ孫も2人。ニューヨークへ留学中の孫が年末年始に帰国したら、現地の話を聞くのが楽しみという。

interview

中嶋房子 さん

撮影場所 ● 生涯学習センター（ばるーん）

鉄筋コンクリートの旧桜田小学校の校舎は、空襲でも焼失しなかった。その後、改築されている。



山崎詩歩（やまざき・しほ）さん

船本知愛（ふなもと・ちいな）さん

楽しみにしていた遠足のおやつ
配給されたのは、
氷砂糖が5、6粒だけでした

山崎——今日は新橋でお話を伺うわけですが、中嶋さんはこのあたりにお住まいだったそうですね？

中嶋——ええ、西新橋2丁目、あの頃の町名でいえば、芝田村町3丁目（戦前は田村町3丁目）に住んでました。今と違って、多くの人が暮らす街でしたから、どの家にも子どもが5、6人いて、通っていた桜田小学校には、1000人くらい児童がいたんですよ。

家のまわりだって、こんなにビルがごちゃごちゃ建ってなくて、車も少なかったですから、家の前の路地にゴザを敷いて、おままごとをして遊んだものです。

近所には下駄屋さん、衣料品屋さん、お菓子屋さん、いろんな商店がありましたよ。氷屋さんでは、太鼓焼というあんこが入っ

うちのご飯はお箸が立つか、立たないか」ということが、子どもの間でも話題でした。食べざかりの子どもが多かったから、どこの家でも、お母さんはやりくりが大変だったでしょうね。今のようには、白いご飯がいつでも好きなだけ食べられるのは、本当に幸せなことなんですよ。



昭和17(1942)年に発行された菓子購入票
(所蔵：港区立郷土歴史館)



山崎——そうすると、おやつのお菓子も……？

中嶋——お米すら口に入らないんですから、お菓子なんてとんでもない！ 小学校に入ってから初めての遠足のとき、学校から「お菓子券（菓子類を購入できる配給切符）」というのをもらったんですよ。それを持って和菓子屋さんへ行ったら、渡されたのは、ちっちゃな紙袋に氷砂糖が5、6粒だけ。それでも、甘い物なんて他になかったから、家族と分けあって大事に食べたのを覚えてます。配給切符にもいろいろ種類があって、肌着や運動靴も「衣料切符」がなければ手に入らなかったんですよ。

船本——仲の良い家族だったんですね。何人での暮らしだったのでしょうか？

中嶋——父と母、それに姉が2人と兄が2人と、末っ子の私の5人きょうだいという家族でした。12歳離れたいちばん上の姉は、女子挺身隊（女性を労働力として動員するための組織）として工場に行っていました。そこでは、

た焼き菓子売っていて、買いに行くと「いつも来てくれるから」って、あんこをおまけで上に乗せてくれるのがうれしかったですね。

山崎——街には、おいしいものがいっぱいあったんですね。

中嶋——ただ、私が生まれた翌年にはもう日中戦争が始まって、実は東京ではだんだん食べる物が足りなくなっていたんですよ。配給されるお米も、太平洋戦争が激しくなってきたら、又力が付いたままの玄米になってしまったので、瓶に入れて棒で何度もついて、自分たちで精米しなければならませんでした。

そのうちに玄米の配給さえ少なくなり、かさを増すために、おかゆにして食べるものが多くなりました。お行儀がよくない話だけど、ふつうのおかゆなら、お箸を刺せば立つでしょう？ でもお米が少ないゆゆるのおかゆでは、倒れてしまう。「今日、

焼夷弾や爆撃弾などの空襲に備える避難訓練が行われていたそうです。「2階から飛び降りるのが怖くて嫌だ」と話していたのを覚えています。

その後、姉は海軍省で仕事をするようになります。そこで後に義兄となる人と交際し始めたのですが、そのことを父がひどく怒りましてね。恋愛も自由にできない、そんな息苦しい時代だったんですよ。

船本——物資もだんだんと乏しくなって、家にある金属を国に供出させられたそうですね。

中嶋——「溶かして武器にする」という理由でした。だからアクセサリーみたいな小さな物は、無理に出さなくても良かったでしょうに、うちの親は、ネックレスや指輪などもすべて正直に差し出したそうです。「姉が将来使えるように」と、七五三の記念に買っておいたルビーの指輪まで供出してしまい、本人は後からずいぶん悔しがっていました。

船本——ご実家は、どんなお仕事だったのですか？

中嶋——室内装飾の裁縫業というカーテンなどを作る仕事で、自宅の近くにもう一軒、ミシンを置いて工員さんが働く作業場も持っていました。ただ、戦時中は、灯火管制のために窓を覆う暗幕を作ることが多くなりましたね。光をしっかりと遮るには、布を二重合わせにする技術が必要だったからです。

灯火管制の演習。電灯を暗幕で覆う人
(提供：共同通信社)



船本——お宅には、防空壕もあったのでしょうか。

中嶋——庭がなかったたので、玄関を入ってすぐの場所に掘りました。ただ、新橋というのは、早くから舗装されて掘れるところがほとんどなかったうえ、もともと埋め立ててできた土地でもあったたので、掘れば必ず水が出たんですよ。このあたりで防空壕を掘った家は、どこも湿気に苦労したと思います。うちでも、壁や床に板を張って対策していました。

疎開先でも空襲警報のサイレンが鳴り隠れるところもない田んぼ道で機銃掃射に身を伏せる

山崎——入学してまもなく、疎開をされたそうですね。

中嶋——東京への空襲が始まったたので、小学校1年生の3学期が終わってすぐに、茨城県の笠間へ縁故疎開をしました。笠間稲

があつたら、もっとおいしくいただけたたのでしょけれど(笑)。

山崎——東京での空襲については、どのような知ったたのでしょうか。

中嶋——笠間へは情報がなかなか届かなかったたので、新橋が焼けたことは、しばらく知りませんでした。東京に残っていた父たち3人が、お鍋だか何だかをぶらさげて笠間へ来たときに、初めて知ったたんです。

山崎——笠間へも、空襲があつたそうなんです。

中嶋——戦争のだいぶ終わり頃に、何度かやられました。笠間は、焼き物でも知られていて、配管や煙突に使う土管を作る工場に、高い煙突が立っていたたので、そこを狙われたたんですよ。県の南には予科練(海軍飛行予科練習生の略。現在の中高生ぐらいの少年を航空兵として養成した)の施設もあつたたので、そこも標的になったたようなんです。

山崎——中嶋さんも被害に遭われたたのですか？

荷という、大きな神社のあるところなんです。母方の祖父が駅の近くに家を用意してくれて、そこへ母と下のきょうだい3人が移りました。父や姉は仕事がありましたし、大学生だった兄も「帝都を守らなければ」と言つて、東京に残りました。

家族が離ればなれになるのですから、それは寂しかったたですよ。父が月に1〜2回ほど、東京から来てくれるのが楽しみでね。手紙で「来る」と知らされた日は、早くから駅へ迎えに行ったたものです。新橋と違って、ひなびた笠間の駅は寂しくて、待っている間は、いびん切ない思いをしました。

山崎——笠間の小学校は、東京とは様子が違っていましたか？

中嶋——洋服ではなく、絆(わづり)布地の模様の二つの着物で通ってくる子もいましたし、ほとんどが下駄履きで、中には裸足の子もいて驚きました。いじめもありましたよ。男の子が、髪の毛に毛虫を付けてくるの！

コラム 14 ●機銃掃射 (きじゅうそうしゃ)

相手をなぎ倒すように機銃(連続発射できる銃)で撃つこと。戦況が悪化し、防空体制が失われていくなか、日本の上空へ敵機が容易に侵入できるようになり、大型機による爆撃とともに、空母から飛来した小型機による、地上への機銃掃射が行われました。はじめは軍事施設や軍需工場などが標的でしたが、次第に駅や病院、学校などの公共施設も狙われるようになり、ついには逃げる民間人そのものを直接撃つようになったたのです。

このような対人攻撃は、日本人に恐怖を植えつけ戦意を喪失させることを目的とするものでしたが、空母へ戻る際に安全に着艦できるよう、弾薬を使い尽くしておく理由もあつたたようなんです。機銃掃射の様子は、機体に搭載されたガンカメラによって上空から撮影され、映像記録としてアメリカの公文書館に保存されています。



東京地区を爆撃するため、空母から発進する艦上爆撃機(提供：共同通信社)

中嶋——あの頃は、敵機が来るとまず警戒

警報の鐘が鳴り、そのあとに空襲警報のサイレンが鳴るものでした。そして、警戒警報が鳴ったら先生は授業を終わらせ、児童を自宅へ帰らせるのが決まりだったのです。でも、笠間でも疎開者がだんだん増えてきて、学校中の教室はみんな満員に。おまけに、私たちのクラスは校舎の端っこの方にあつたから、その日も警戒警報が鳴ったはずなのに、先生は気づかなかつたらしいんですね。そしたら、いきなり空襲警報のサイレンが響いたので、急いで「家に帰りなさい」ということになりました。仕方なく級友たちと通学路を歩きだしたところへ、敵機がやってきたんです。

最初に一機が見え、そのあとV字に隊列を組んで、何機か飛んでくるのが見えました。隠れる建物もない田んぼ道だったので、少しでも木が生えている桑畑に逃げ込んだんです。東京にいる頃から繰り返し練習し

空襲を受けたときの破片が 夫の体に何十年も残っていた

船本——燃えてしまった東京の家は、それから再建されたのでしょうか。

中嶋——建材なんて、とても手に入りませんでしたね。そこで、笠間の家にあった物を壊し、その木材を親戚のおじさんが大工さんとトラックで運んできて、雨露をしのげるぐらいのバラックを新橋に建てたのが、最初の家だったそうです。

船本——中嶋さんも、そこに住んだのですか？

中嶋——いえ、戦後すぐの新橋は、毎晩どこかで火事があるような、殺伐とした雰囲気でした。バラックでは戸締まりも満足にできないし、窓にコートなどをかけておいたら、すぐに外から盗まれちゃう。「女の子は1人で外出しちゃいけない」とも言われるほどだったそうです。

そんな物騒なところではとても子育ては

ていた、耳と目を押さえる姿勢で地べたにうずくまりました（爆風で体の内側がやられないようにするためだそうです）。幸い、私たちは無事でしたけれど、笠間の駅で中学生が1人、機銃掃射で撃たれて亡くなったそうです。

ようやく家に何とかたどり着き、家族に話をしたところ、6年生だった下の兄が「今度そんなことがあれば、僕が敵機に立ち向かって助けるからな」と言ってくれたのが、頼もしかったですね。

山崎——日本が降伏した時のことは覚えていますか。

中嶋——自宅のラジオで、いわゆる玉音放送を聞きました。ラジオがない家も多かったので、近所の人もうちに集まっていたね。何を言っているか、私にはよくわかりませんでした。大人たちはみんなシーンとしていて。静かなお昼だったな、という印象が残っています。

できないと、東京の家にはまず父と姉と兄だけが戻り、笠間にいた私たちは、しばらくそのまま暮らしていました。私が新橋へ戻ったのは昭和23（1948）年、中学1年生の2学期になってからです。

船本——そのとき、中学校はどんな様子でしたか。

中嶋——入ったのは芝浜中学校（現・三田中学校）で、私はその3年生です。でも、新しい学校教育法が施行されたばかりで校舎も教室もまったく足りなくて、私たち1年生は、浜松町の芝商業高校に間借り。2年生と3年生は、芝にあった神明小学校を間借りして勉強をしました。椅子や机も、どこから寄せ集めたものでしたね。

山崎——食事はふつうにできるようになったのでしょうか。

中嶋——いえ、まだまだ大変でした。新橋駅周辺にも闇市がたくさんありましたし、銀座の大通りでさえ、地べたに物を並べて

コラム 15 ● 指定食堂（していしょくどう）

戦時下では、さまざまな物資を国に供出し、それを配給によって分け直す経済体制が敷かれ、主な食糧や生活必需品のほとんどが配給の対象となりました。自炊する場合は、たとえば米そのものの配給を受けることになりますが、自炊しない場合は、まず「米穀通帳」を示して「外食券（主要食糧選択購入切符）」をもらい、都道府県に登録された「指定食堂（外食券食堂）」で食事をするようになります。食堂側も、利用客から渡される外食券に応じて、米の供給を安定的に受けることができました。

戦後も食糧難は続いたため、この外食券食堂の制度は昭和24（1949）年まで続けられます。その後も、外食で暮らす人たちの食生活の安定を目的とする民生食堂の制度へ趣旨が引き継がれ、これらも指定食堂と呼ばれました。



外食券を持たない人のための食堂もあり、どこも行列だった。昭和19（1944）年6月、東京・有楽町で撮影（提供：毎日新聞社）



芝浜中学校
京都・奈良への修学旅行

商売をしていました。母がそうしたところをまわって、家族の食べる物を苦労して集めていたのを覚えています。

山崎——そういえば、その後に結婚されるお相手は、ご実家が食堂だったそうですね。

中嶋——東京都の指定食堂を営んでいました。実は私の兄が、その家の娘さんと結婚していたことから、その方の弟と私との縁談が持ち上がったんです。小さい時からずっと食べる物に苦労してきたので、「飲食に関わる家の人なら良いかもしれない」と思ってた（笑）。夫は、同じ桜田小学校の6年先輩という縁もありましたし。

ただ、夫自身は、得意だった英語を生かして、洋食器を扱う貿易会社に勤めていたため、私たちが食堂の仕事に関わることはありませんでしたけれど。

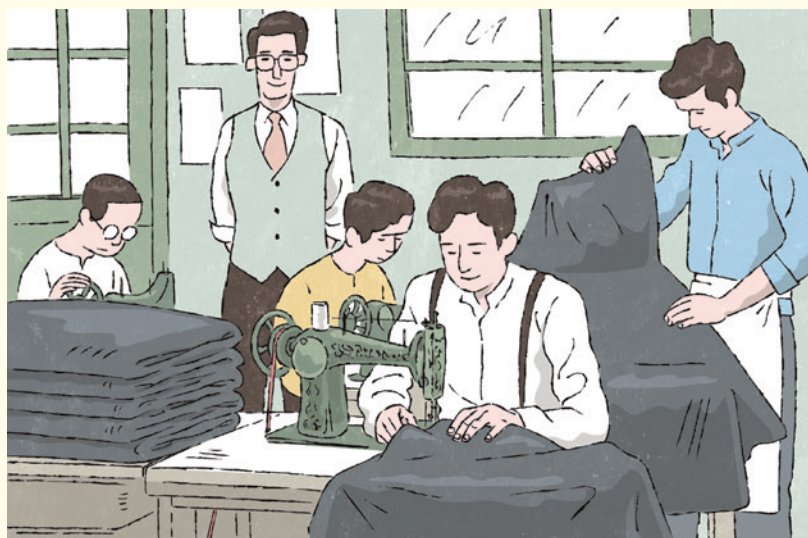
山崎——ご家族は、空襲の被害に遭われたそうですね。

中嶋——夫が爆撃に遭ったのは中学生の頃

中嶋さんの物語

Story of My Life

高度な技術で作っていた灯火管制用の厚い〈暗幕〉
そのための仕事場も、空襲を受けて全部焼けちゃった



と聞きました。病院に担ぎ込まれたのですが、破片が体内に残ったままになっていたんです。そのことがわかったのは、夫が高齢になりリンパ腺が腫れて検査を受けた時。その後、手術をして破片を取り出した翌年、90歳で生涯を閉じました。世の中が落ち着いてからちゃんと調べていたらと、ずいぶん後悔したものです。

山崎——戦争の傷が、生涯にわたって続いてしまったんですね。

船本——今日はたくさんの貴重なお話を、ありがとうございました。

中嶋さんからのメッセージ

私と夫は、お互いの親を送り、子育てや仕事も一段落した60代の頃に「どこか海外へ旅行がしたいね」と計画を立てました。2人とも戦争ではずいぶん苦労しましたが、「あんなに日本を負かしたアメリカって国を見てみよう」と思ったんですよ。そして、実際に行ってみたら、まあ、あんなに広くて資源も豊富にある国と、戦争をしたって勝てるわけがありませんね。「あの頃の日本は、いったい何を考えていたんだろう」と、夫としみじみ話したものでした。

皆さんには、若い頃からどんな世界へ出ていって、見聞を広めてほしいと思います。狭い日本の中だけにいるんじゃない、いろんな国の人たちと会って、話して、それぞれの考え方や暮らし方について知ることが大事。そうやって、お互いを理解し話し合いができれば、きっと戦争も避けることができると思います。

中嶋さんの父親は〈室内装飾裁縫業〉。百貨店などからの注文を受けて、オーダーメイドでカーテンを作っていたそうです。

「戦前は、フランスやイギリスの大使館の仕事もしていたそうです。

空襲に備えて〈灯火管制〉が始まると、窓から灯りが漏れるのを防ぐために、光をしっかりと遮る〈暗幕〉が使われるようになります。厚い生地を縫い合わせたカーテンを作る職人は限られていますから、軍隊や病院、皇室からも注文を受けるようになりました。自宅近くの仕事場には、約20台のミシンを置いて、男性の工員や住み込みのお手伝いさんなどが、忙しく働いていたんです。でも兵隊に取られてだんだんと減っていき、ついには空襲でミシンごと焼けてしまいました。疎開先の笠間へたどりついた父の、全部焼けちゃった、という声は、今も耳に残っています」